

新二世のトランスナショナルな 生活経験とディアスポラ性

—「日本」から距離を置くグアムの日本人青年に着目して—

芝 野 淳 一

1. 課題の設定

近年、海外に住む日本人が多様化し、現地に長期滞在・永住する人々が増加している。それにともない、現地社会で生まれ育つ子どもも増加傾向にあることが報告されている（佐藤 2008）。アメリカでは、このような戦後の日本人移住者は「新二世（Shin-Nisei）」と呼ばれており、戦前の日系移民やその子孫とは異なる存在として位置づけられている（Tsuda 2016; 山田 2019 など）¹⁾。また、かれらは帰国を前提として現地で生活する海外帰国生とも異なる階層的背景及び移動形態を有している（佐藤 2008）。

従来の日系移民研究の議論の中心となってきたのは、戦前の移住者やその子孫であった（竹沢 2017; 南川 2007 など）。しかし、近年、日系社会において新二世の存在が顕著になる中で、かれらの特徴を捉えようとする研究が蓄積されはじめている。そこで共通して指摘されているのは、新二世は現地社会に溶け込んでいる一方で、「日本」とも深い関わりを持ちながら生活していることである。かれらは、親の教育方針、在外教育施設、日本への頻繁な渡航、日本のメディアを通じて、海外に居ながらも日本語・日本文化や日本とのネットワークを保持しているという（知念 2008; 藤田 2012; Tsuda 2016; 山田 2019 など）。さらに、このようなトランスナショナルな生活を通じて、進学や就職を機に日本に帰還する新二世の若者もい

る(芝野 2016a; 2017; Tsuda 2019)。こうした新二世のバイリンガル・バイカルチュラルな特徴は、第二次世界大戦中に厳しい人種差別や強い同化圧力に直面する中で「日本」から距離を置いてきた戦前の日系二世や、日本とのつながりや日本人意識が薄れつつある同世代の日系四世・五世とは異なるものである(Tsuda 2016; 山田 2019)。

このように先行研究では、新二世が他の移民世代と比べてトランスナショナルな生活を送っていることや、それゆえに一度も／ほとんど住んだことのない「日本」に対して親和的な傾向を有していることを明らかにしてきた。しかし、新二世の集団内部における差異や多様性にまで踏み込んだ分析はなされておらず、特に日本語・日本文化や日本とのネットワークをあまり保持していない者や、現地社会に積極的に同化しようとする者には焦点が当たっていない。その結果、多様であるはずの新二世の「日本」との距離の取り方が、一枚岩的に描かれてしまっている。

そこで、本稿では、グアム育ちの日本人青年を事例に、これまで注目されてこなかった「日本」から距離を置く新二世を取り上げ、かれらの「日本」との距離の取り方とトランスナショナルな生活の関係性を検討する。これを通じて、新二世に関する研究に対する示唆を導き出すことが目的である。

2. 分析の視点

本稿では、新二世の「日本」との距離の取り方を分析・考察するために、「ディアスポラ性(diasporicity)」(Tsuda 2018)の概念を参考にする²⁾。ディアスポラ性とは、あるエスニック集団が祖国とのトランスナショナルな社会関係に相対的にどの程度埋め込まれているのか、また祖国にどの程度親和的であるのかを分析するための概念である(Tsuda 2018)。

Tsuda (2018) は、従来のディアスポラ研究が「誰がディアスポラなのか」を厳密に定義することに執着し、排他的かつ生産性のない議論に陥っていることを批判している。この問題を克服するために、氏は離散したエ

スニック集団は多かれ少なかれ祖国とのトランスナショナルな社会関係に埋め込まれていることを前提とし、かれらのディアスポラ性の相対的な強さ／弱さを分析することを推奨している。

この概念において最も重要なのは、ディアスポラを絶対的な状態ではなく、相対的な状態として捉えようとしている点である。このことにより、「なぜ、ある人が他の人よりもディアスポラ的なのか」（Tsuda 2018, p.191）といった比較分析が可能になる。これは、新二世の「日本」との距離の取り方の多様性を明らかにしようとする本研究にとって重要な視点となる。

当然ながら、異なるディアスポラは異なるディアスポラ性を有している。ディアスポラ性は集団間でも多様であるが、集団内でも様々な形があり得る。Tsuda（2018）は、ディアスポラ性を規定する要因として、言語・文化の種類や継承度、宗教の種類や信仰度、国籍の種類、ジェンダーの差異、世代や年齢の違い、ホスト社会における同化／周辺化のレベルなどをあげている。このように個々の属性や置かれている状況を分析の俎上に載せることで、ディアスポラ性のグラデーションを描くことができる。こうした視点は、新二世の「日本」との距離の取り方の多様性を、その背景的要因に着目して分析・考察する必要があることを示唆している。

以上の理論的背景を踏まえ、本稿では「日本」から距離を置くグアム育ちの新二世に対するインタビュー調査に基づき、かれらがどのようなトランスナショナルな生活を経験しているのか、また、そうした生活を送る中で、なぜ、どのように「日本」と距離を置くようになったのかを分析・考察する。

本稿の構成は次のとおりである。まず、次節（3節）で調査及びフィールドの概要を述べた後、4節でグアム育ちの新二世のトランスナショナルな生活経験を記述する。続く5節では、新二世の「日本」との距離の取り方とその背景要因を明らかにする。最後に6節で本研究の知見が当該研究領域に与える示唆について論じる。

3. 調査及びフィールドの概要

3.1 調査概要

本稿で扱うデータは、2013～14年にグアムで実施した日本人青年7名（女性4名、男性3名）に対するインタビューによって得られたものである。対象者は、筆者が2012年から継続しているグアムでのフィールド調査で知り合った日本人移住者を通じて、雪だるま式にアクセスした（表1参照）。なお、筆者はこれまで10代後半から20代後半（高校生から社会人まで）の二世21名（本研究の対象者を含む）にインタビューを実施しており³⁾、本稿ではそれらのデータも適宜参照している。

本稿の対象者は、グアムに永住目的で移住した日本人の両親を持つ若者である。日本生まれが3名、グアム生まれが4名で、前者はいずれも幼少期にグアムに移住しており日本で生活した経験や記憶はほぼないという。インタビュー当時、全員が20代であり、5名が現地の観光関連産業に従事する社会人で、2名が現地の大学や短大に通う学生であった。

表1：対象者のプロフィール

対象者	年齢	性別	出生地	国籍	移住歴	学歴	職業	日本就業・就学経験	米本土・ハワイ就業・就学経験	日本人学校・補習校	グアム公立学校	グアム私立学校	調査日
SG1	20代後半	男	グアム	米国・日本	-	大卒(米)	観光関連		○	○		○	2013.8
SG2	20代後半	女	グアム	米国・日本	-	高卒(グ)	観光関連			○	○	○	2014.2
SG3	20代後半	男	グアム	米国・日本	-	短大卒(ハ)	観光関連		○	○		○	2013.8
SG4	20代後半	女	グアム	米国	-	大卒(グ)	観光関連		○	○		○	2014.2
SG5	20代後半	女	日本	日本	24年	短大卒(米)	観光関連		○	○		○	2014.2
SG6	20代前半	男	日本	日本	19年	—	大学生			○	○	○	2014.2
SG7	20代前半	女	日本	日本	17年	—	短大生	○		○		○	2014.2

※ (グ) はグアム、(米) はアメリカ本土、(ハ) はハワイのこと。

インタビューは半構造化形式で実施し、幼少期からのグアムでの生活経験を振り返ってもらいつつ、日本との関わりや帰属意識について自由に語ってもらった。聞き取りは対象者の希望に合わせてカフェ、レストラン、対象者の自宅、ホテルのロビー、職場などで行い、1.5～2.5時間の範囲で実施した。インタビューは基本的に日本語で行い、必要に応じて英語を使用した。

さらに、インタビューの語りを解釈する際、グアムで実施したフィールド調査(現地校、日本人学校、職場、家庭、飲食店やスーパー、市街地や田舎の様子など)で得た様々な情報を役立てた。このような、フィールド調査によって知り得た対象者の生活の文脈を考慮しながらインタビュー・データを分析・解釈する方法を「エスノグラフィック・インタビュー」(O'Reilly, 2012)と呼ぶが、本研究もこの方法論に依拠している。

3.2 グアムの社会背景

次に、対象者が育ったグアムの社会背景について説明する。グアムはアメリカの非編入領土として位置づけられている。人口約16万人であり、チャモロ系約4割、フィリピン系約3割をはじめ、周辺島嶼部やアジア系の移民など多様な背景を持つ人々によって構成される多文化社会である(Guam BSP 2017)。2018年時点で日本人は約3,800人となっており、その7割以上が長期滞在・永住者であることが特徴である(外務省 2019)。かつては駐在員などの短期滞在者が大半を占めていたが、1990年代後半より現地の人と国際結婚した日本人や、海外移住を目的とした現地採用者や自営業者が急増している。

グアムの経済は、大きく「観光」と「基地」の二つに依存しており(山口 2010)、財政基盤は決して安定しているとはいえない。また、周辺島嶼部系の移民を中心とした貧困問題が、長らく島の深刻な社会問題となっている(井上 2015)。

グアムはスペイン、アメリカ、日本に植民地支配されてきた歴史を有し

ている。第二次世界大戦以降は、アメリカの植民地主義的な支配と向き合ってきた。現在も、アメリカの「軍事基地化」や、行政、教育、経済、マスメディアなどを通じた「アメリカ化」の浸透は継続している（長島 2015）。一方で、1970年代以降、反・脱植民地運動が展開され、先住民チャモロの主権を要求する「チャモロ・ナショナリズム」も高まりを見せている（長島 2015）。この動きは教育分野にも影響を与え、公立学校ではチャモロ・アイデンティティの育成を優先する風潮が強まっている（中山 2015）。

他方、グアムには戦前より日本人が移住しており、現在も多くの子孫が居住している（中山 2018）。戦中の1941年から1944年の間は日本の植民地下にあり、「大宮島」と呼ばれていた⁴⁾。その悲惨な出来事は現在もグアム社会に深く刻まれており、日本統治時代の記憶と向き合い続ける住民も多い（山口 2007）。現在、日本人はグアムの総生産の約7割を占める観光関連産業の主な担い手となっており（山口 2010）⁵⁾、それゆえにグアムにおける日本人のプレゼンスはアメリカ本土と比べて高い。なお、新二世の若者を含め、日本人移住者の多くはグアムの観光業に従事している。

これらの基本情報を踏まえ、次節以降では、グアム育ちの新二世の「日本」との距離の取り方を分析・考察する。

4. グアムで育つ新二世のトランスナショナルな生活経験

本節では、本稿の対象者が「グアム」と「日本」に同時に関与しながら育ってきたことを記述し、かれらのトランスナショナルな生活経験を明らかにする。なお、本節の内容は、本研究の対象者だけでなく、筆者がグアムでのフィールド調査で出会った全ての新二世の情報を参照しながら記述した（3.1 参照）。

4.1 「グアム」との関わり

まず、新二世の「グアム」との関わりを、「現地校」と「グアム社会」

における経験の二つに分けて記述する。

①現地校における経験

幼少期からグアムで育つ新二世は、第一に現地校で「グアム」を経験する。グアムの新二世の多くは、東アジア系の生徒の比率が高く、学力レベルも比較的高い私立学校に通う。一方で、公立学校に通う日本人は少ない。こうした学校選択の背景には、ローカル色の強い公立学校に通うことで、グアム社会に過度に同化してしまうことや、学校における「荒れ」や日本人に対する差別を危惧する親の教育方針が影響している（芝野 2020）。

まず、私立学校での経験をみていく。インタビューにおいて最も印象的だったのが、差別やいじめの経験がほとんど語られなかったことである。その理由として、在籍者の大半が東アジア系の児童生徒であることから日本人がマジョリティ側に属していたことや、「チャモロ」や「白人」など絶対的なマジョリティが少なく特定の集団の周辺化が生じにくかったことがあげられた。中には、英語力がないためにいじめられたことや、教員と上手く意志疎通がとれなかったことを話す者もいたが、それは時間の経過とともに解消されたという。

しかし、キリスト教徒ではないかれらは、学校において宗教的マイノリティであったため、キリスト教主義の教育方針に常に違和感を抱いていたことも話している。聖書の授業、信仰告白や聖書の拝読、賛美歌の合唱や説教への傾聴などを、当然のように受け入れる教員やクラスメートに疑問を抱かずにはいられなかったことが多く語られた。

一方で、公立学校経験者は、私立学校とは異なる「ゆるい」文化や、ひどい「荒れ」に関するエピソードをコミカルに語る傾向にあった。また、自らがローカル色の強い公立学校のコミュニティに埋め込まれていたことをポジティブに語る者もいた。ただし、私立学校とは違い、学校の構成員の大半がチャモロ系やフィリピン系の生徒で占められているため、自らのマイノリティ性を日常的に自覚しなければならなかったことを語る者も多い。中には、日本統治時代の残虐な歴史について問い詰められ、いじめら

れたと語る者もいた。

こうした公立学校での新二世の経験に、グアムの教育現場における「チャモロ・ナショナリズム」の高まりの影響を見ることは可能である（長島 2015, 中山 2015）。中山（2015）は、多文化化が進むグアムの学校において、チャモロ優位とも取れる教育が展開されることの矛盾を指摘している⁶⁾。公立学校に通う新二世のネガティブな学校経験は、そのようなグアムの公教育が抱える問題と無関係ではないだろう。

これらに加え、私立・公立にかかわらず、国家斉唱や「忠誠の誓い」唱和を義務づけられていた者や JROTC（ジュニア予備役将校訓練課程）を履修していた者も多く、軍事教育を通じたアメリカ・ナショナリズムに日常的に接しながら育ってきた様子もうかがえた。

②グアム社会における経験

新二世は、学校においてのみ「グアム」を経験しているわけではなく、それ以外の場所においても「グアム」と接触している。多くが、現地の人々のフランクさや陽気さなどをグアム社会のポジティブな側面として語っていた。また、多様な住民が「Guamanian（グアムに住む人の意味）」としてゆるやかに統合されている状況をポジティブに評価する者もいた⁷⁾。

一方で、グアム社会に否定的なまなざしを向ける新二世もいる。現地の人々の生活・就労態度に対する不満は、しばしば聞かれた。確かに、グアムの観光関連産業の担い手の多くは日系資本であり、消費者の大多数は来島者のうち最も多くの割合を占める日本人である。こうした事実により、新二世の間には「グアムを支えているのは日本人」という認識が広く共有されていた。しかし、かれらのような日本人は政策的緊急性を問われないミドルクラス移民として処遇されているため、様々な支援制度から除外されている。その一方で、先住民（チャモロ系）や自由連合協定によるマイクロネシア島嶼地域からの移民は、アメリカやグアムから十分な公的扶助を受けられることができる（長島 2015; 井上 2015）。こうした状況に不満を持つ新二世は、「グアムを支える日本人／恩恵にあぐらをかいて働かないロー

カル」という二項対立的な認識を強調していた。ただし、かれらは観光地で働くことに必ずしもやりがいを感じているわけではなく、多くの新二世がリゾート地で生活することの退屈さや物足りなさを語っていた⁸⁾。

以上、新二世の現地校とグアム社会での経験を記述した。無論、これらの内容は、あくまでも本調査の対象となった新二世が経験し、語る「グアム」である。したがって、実際にグアムが退屈な場所なのか、現地の人々が怠けているのか、学校で差別や排除があるのかを示すものではない。

4.2 「日本」との関わり

ここからは、「日本」と日常的・非日常的に関わりながらグアムで生活する新二世の様子を、「家庭生活」、「在外教育施設と習い事」、「日本への短期訪問とグアムの観光地」における経験の三つに分けて記述する。

① 家庭生活における経験

まず、家庭生活において新二世が日常的に「日本」と接触している様子を見ていく。家庭生活における「日本」との接触を最も象徴しているのが、日本語を基調とした家庭内でのコミュニケーションである。本研究の対象となった新二世の親は日本語しか話せない場合が多く、家庭内でのコミュニケーションは基本的に日本語で行われていた(きょうだい間では、英語と日本語をスイッチしながら話すケースもある)。ほとんどの者が、幼少期に英語使用禁止が義務づけられていたことを振り返っていた。こうした教育方針には、現地校で英語漬けの毎日を送る子どもの日本語力を維持させるねらいがある(芝野 2020)。

また、かれらは日本のテレビ、本・漫画、ビデオなどを通じて日本語や日本のサブカルチャーに触れながら生活を送ってきたという。現在では、インターネットの普及により、以前よりも低コストで手軽に日本の番組を視聴できる。さらに、iPhoneなどの携帯端末の発達によりウェブサイトやSNSを通じて「日本」に「アクセスしっぱなし」の状態をつくりあげることができる。こうした各種メディアやサブカルチャーはグアムに住む

新二世の「日本」との関わりに重要な役割を果たしていた。

さらに、親が消費する「日本的なもの」からも影響を受けていた。家や車のなかで流れる日本の音楽やニュース、食卓に毎日のように並ぶ白米とみそ汁、親と行く日系スーパーや日本食レストランなどを通じて、無意識のうちに「日本」を経験しているのである。

他方で、家族間のつながりを通じて「日本」と接触していたことにも注目したい。新二世は、親が関与するネットワークに埋め込まれ、日本人同士の交流を深めていた。そこでの人間関係の構築や情報の交換は、海外に居ながら「日本」との関係を維持する上で欠かせないものとなっていた。

②在外教育施設⁹⁾と習い事における経験

次に、在外教育施設と習い事における経験をみていく。本稿の対象者は全員、グアム日本人学校（以下、全日制と記す）かグアム補習授業校（以下、補習校と記す）のいずれかに通った経験がある。日本に住んだことのない新二世にとって、日本語・日本文化や「日本から来た日本人」（駐在家庭の子どもや派遣教員）と接することができる在外教育施設は、リアルな「日本」を体験できる重要な場所となっていた。

インタビューにおいて最も聞かれたのは、全日制であっても補習校であっても、日本語や日本の歴史をしっかりと学ぶことができたことで、自分のスキルアップに繋がったというエピソードである。週1回の補習校であっても、苦勞して日本の国語や歴史などを学び抜いた新二世の多くはバイリンガル・バイカルチュラルに成長している。ほとんどの新二世が、「日本の新聞が読めるようになった」、「漢字を使用的確かな文章が書けるようになった」、「流暢で癖のない日本語で会話できるようになった」など、在外教育施設での経験をポジティブに評価していた。ただし、在外教育施設での教育が現地校と比べて非常に厳しかったと振り返る新二世も多い。学年が上がるにつれて漢字の読み書きや国語の内容が難しくなってくるため、授業を理解することや宿題をこなすのに非常に苦勞した経験はその典型例といえる。また、そのような厳しさゆえに、在外教育施設にあまり積極的

に関与しなかった者は、日本語を十分にマスターすることができず、それについて後悔する様子が見えられた。

ちなみに、在外教育施設に対する肯定的な評価は、言語や文化の習得に限ったことだけではない。同世代の同じような境遇の新二世が集う在外教育施設は、かれらに居場所や日本人同士の交友関係を深める場を提供していたという。

他方、習い事などの学校外活動においても「日本」と関わりを持つ機会がある。対象者全員が、サッカー、スイミング、日本舞踊、合気道などの習い事に通った経験があり、いずれのスクールも指導者が日本人であり所属メンバーのほとんどが日本人で占められている。こうした習い事は日本の部活動のような機能を果たしており、新二世の「日本」の経験に重要な影響を与えていた。具体的には、日本人の指導者や先輩などとのつながりを通じて、日本のサブカルチャーから高校・大学事情まで、「日本」に関するありとあらゆる情報が日常的に交換されていたという。

③日本への短期訪問及びグアムの観光地における経験

ここまで、新二世がグアムで育ちながらも家庭生活や在外教育施設・習い事において「日本」と日常的に関与する様子を記述してきた。一方で、非日常的な「日本」との接触も見逃してはならない重要な経験である。例えば、現地の日本人会などが主催する各種イベント(とりわけグアムのローカル社会に対しても開放されている「祭り」などのエスニック・イベント)における「盆踊り」、「よさこい」、「神輿」、「屋台」、「浴衣」といった、「日本」との出会いがそれにあたる。

他方で、かれらは、親の里帰り、習い事の合宿・遠征、在外教育施設の修学旅行などで日本に頻繁に渡航していた。このように、短期訪問を通じて非日常的に体験される「日本」も、新二世のトランスナショナルな生活経験を理解する上で重要である。日本において、日本で生まれ育った日本人から「ガイジン」として扱われたり、日本で生まれ育った日本人と自分との間にある文化的差異に気づかされたりすることで、自らの帰属意識が

揺らぐ経験をした者もいた。その一方で、日本の消費文化や利便性の良さに憧れを抱いたり、祖父母や親戚との接触を通じて自らのルーツを確認したりするなど、日本に対するポジティブな感情を醸成させる者もいた。

これらに加え、かれらは幼少期よりグアムの観光地で日本人観光客と毎日のように接触している。また、グアムで働く新二世はほぼ例外なく日本人向けの観光業やその関連産業に従事するため、職場において日本人駐在員とも日常的に接することになる。こうした日本から来た日本人を通じて、かれらはグアムに居ながらも「日本」を経験している。

なお、新二世の中には進学のためにアメリカ本土やハワイで生活したことのある者ものもいる(3.1の表1参照)。かれらは、そのような場所においても多様な形で「日本」と接触していた(例えば、ハワイの日系人との出会いなど)。

5. 「日本」から距離を置く新二世

前節では、グアム育ちの新二世が幼少期より「グアム」と「日本」の両方の文脈に関与しながら生活を送っていることを記述した。拙稿(芝野2016a; 2017)では、こうしたトランスナショナルな生活の中で「グアム」と「日本」を比較し、一方ではグアム社会やローカルの人々に対する否定的な感情を生み出し、他方では日本社会や日本人であることに肯定的なイメージを付与する新二世を取り上げた。また、そうした感情やイメージが、「グアムからの脱出」と「憧れの日本への帰還」という進路選択に結びつくことを明らかにした。このような新二世は、ディアスポラ性が比較的強いケースだといえるだろう。

一方で、トランスナショナルな生活を送ることで、ディアスポラ性が弱まるケースもみられた。本節では、そのような新二世を取り上げ、かれらがなぜ、どのように「日本」から距離を取ろうとするのかを分析・考察する¹⁰⁾。

5.1 「日本」との距離の取り方とその背景要因

本稿の対象者は、「日本」から距離を置く理由を様々に表現していたが、それらは大きく「グアムの居心地の良さ」、「日本語力と日本文化の知識量」、「日本社会の文化的閉鎖性」の三つに分類できる。以下、それぞれについて詳細を記述する。

①グアムの居心地の良さ

「日本」から距離を置こうとする新二世の多くは、グアムのゆったりとしたライフスタイルやローカルの友人とのつながりに居心地の良さを感じており、グアムでの生活をポジティブに捉える傾向にあった。こうした感情は、日本への短期訪問で忙しい日常を過ごす日本人と出会うことや、自分の親や職場の駐在員の勤勉でパンクチュアルな姿勢を目の当たりにすることで強化されていた。例えば、日本に帰還した親戚やきょうだいを持つSG2やSG3は、自分だけが日本での進学や就職を選ばずグアムに残った理由を、以下のように説明する。

日本に行っても、多分住めないと思いますね。私、（日本の）実家が都会なんで、結構グアムにいとマイペースなものもあるから。時間通りにそういう生活をするのとか。[日本には帰ったことあるんですか?] 遊びに行ったりとかします。その時も（高校卒業時）やっぱりグアムにはみんな友だちがいたし、離れたくなかった。[今後はもう住む予定とかもないんですよね?] 日本ですか? 特にないですね。（SG2）

[日本の大学に行きたいとか日本で働きたいとかは?] ないです。僕はローカル、ちょっとリラックス気分なんですけど、日本から滞在しながら働くツアーガイドなんか色々いるんですけど、すごく働き屋です。（…）日本から来る人、すごく働き屋ですごく頑張り屋なんですけど、ちょっと頑張り過ぎっていう面もあるかなと思って、グアムスタイルでは遅いかなと。[それは自分のご両親を見てても思いますか?] 思います。お

父さん見ててすごく思います。もう、仕事がほぼですね、家にほとんどいないんで。(SG3)

とりわけ、SG2は非常に強いローカル志向を示していた。自らをチャモロ人と日本人の「半分半分」であると主張していたことや(彼女の両親は、ともに日本で生まれ育ち、日本国籍を持つ日本人である)、高校卒業後に米軍への入隊を試みたエピソードを語っていたことが印象的であった。さらに、彼女はインタビューにおいて、自分がグアムのローカル社会にどっぷり浸かる中で身につけた「ローカルらしさ」を強調することが多々あった。以下は、SG2が食の嗜好とともに自身の「ローカルらしさ」語る場面である。

だって私食生活もフィナデニソースって、しょうゆにタマネギとか入ってて、レモンとかお酢入れて、唐辛子とか入ってる日本でいうポン酢みたいなのがあるんですけど、なんかバーベキューとかあると、必ずそれがないとだめ。もしくはレッドライス(伝統的なチャモロ料理のひとつ)。ご飯に絶対それをかけて食べるんですよ。ローカルフードで。(SG2)

このように、「グアム」でのポジティブな経験と「日本」とのネガティブな接触を通じて、「日本」から距離を置き、「グアム」に親和的になっていくことがわかる。そして、それがSG2のような強烈なローカル志向へと導く場合もあるのだ。

②日本語力と日本文化の知識量

また、自身の「日本」からの距離の遠さを、日本語力の低さや日本文化の知識の少なさと関連づけながら説明する者もいる。先に紹介したSG3は、自分のアイデンティティの「濃淡」を以下のように説明している。

自分的にはアメリカ人だと思ってます。外国人ですね、日本人にしたら。

日本の文化とか歴史とかよく知らないの、アメリカの歴史の方が知っているんで。あと英語の方が上手じゃないですか。だから、そう比べちゃうと英語とアメリカの方が近いかな。けど、僕日本人だとも思ってますんで、ちょっと変わった日本人かなと。日本に帰っても僕みたいな日本人はいないかもしれないというか。（SG3）

彼は自分が二つのアイデンティティ（日本人でもありアメリカ人でもある）を持っていることを主張しているが、日本語力と日本文化の知識量が英語力やアメリカ文化の知識量よりも欠けていることを理由に、どちらかというアメリカ人寄りであると述べている。興味深いのが、彼は日本で生まれ育った日本人とアメリカナイズされた環境で育った自分を比較しながら、自らのディアスポラ性の弱さを説明していることである（「外国人です、日本人にしたら」「ちょっと変わった日本人かなと。日本に帰っても僕みたいな日本人はいないかもしれないというか」）。これは、彼が日本への渡航や職場を通じて頻繁に日本で生まれ育った日本人と接触していることが影響していると思われる。また、彼は日本で生まれ育った日本人だけでなく、日本語や日本文化をあまり知らない「日系人」を比較対象とすることで、アメリカ人寄りの日本人という自己認識を強化していた。以下の語りは、進学のためハワイで生活していたときに出会った日系人と自分との共通点を話す場面である。

ハワイに行っても日本人結構いるんですけど、日本語しゃべれない日本人が多いんです。だから、見た目は100%日本人なんですけど、本当アメリカン・ジャパニーズ。（…）ハワイでは普通に感じてました。僕の人種っていうか、アメリカン・ジャパニーズとして。他にもいっぱいいたんで、1人だけじゃないって感じで、普通でしたね、ハワイで。（SG3）

彼は、「見た目は100%日本人」にもかかわらず日本語が話せない「ア

メリカン・ジャパニーズ」とハワイで出会ったことで、「日本」にあまり関与しない自身のスタンスやアメリカ人寄りの日本人アイデンティティという立ち位置を肯定的に捉えることができたという。このように、SG3は複数の場所への移動経験とそこでの多様な日本人との接触を通じて、「日本」から距離を置くようになっていたのである。

次のSG4は、SG3よりも強い形で自分と「日本」との距離の遠さを語っている。彼女は、補習校を小学校でやめてしまったことが原因で日本語の読み書きができなくなり、日本語での会話も苦手になってしまったことを、若干の後悔とともに語っている。

[日本人補習校は行ってた?] 行ってて、6年生でやめた。勉強とダンスと補習校行ってたから no free time だった。(補習校は) 友だちが行ってたから楽しかったけど勉強はおもしろくない、日記とか文章書くのが嫌だった。(…) I only went to the 日本人学校6年生まで。Now that I'm older, I wish I finish. I wish I study more and pay attention more when I was going to Japanese school. (SG4)

また、自身の日本語力にコンプレックスを持っていることだけでなく、補習校をやめたことで日本人との接触機会もなくなったとも話している。そのため、中学生以降の友人関係の中心はローカルの同級生であり、日本人の友人と遊ぶことはほとんどなかったという。現在も、生活の中心はグアムのローカル社会である。そんな彼女は、自分に「日本人の血」が入っていることを誇りに思うと話す一方で、日本で生まれ育った日本人やグアムに住む他の日本人よりも日本語がうまく話せないことを理由に、自身のことを「*Japanese American* かな、もっと *American* のほうが強い」と認識している。実際に、彼女はアメリカ国籍であることを宣言しており、日本のパスポートは更新していないという。また、結婚相手についても、日本人との結婚は一度も想像したことがなく、ローカルの男性（特にチャモ

ロ) との結婚が自然だと考えている。

無論、SG3 や SG4 が自らのアメリカ人性を強調することと、かれらがグアム生まれであり幼少期より現地校やグアム社会においてアメリカ国籍を持つアメリカ市民として扱われてきたことは、無関係ではないだろう。

③日本社会の文化的閉鎖性

さらに、日本社会における文化的閉鎖性を理由に、「日本」から距離を置く新二世もいる。例えば、SG5 は、ジェンダー規範のしがらみや国際的な若者の少なさを持ち出しながら「日本」と距離を取る。彼女は、幼少期より積極的に日本語や日本文化を勉強してきたといい、補習校も優秀な成績で卒業した。しかし、現地の高校で日本人以外の友人と仲良くなるにつれて、「日本」に対する興味関心は徐々に冷却されたという。そして、進学や就職を通じてグアムやアメリカの文化に馴染んでいく中で、次第に「日本」のネガティブな側面が目につくようになったという。特に、日本社会に蔓延る女性が男性に尽くすことを善とする文化や、英語が話せない内向きな人々が多いことに疑問を抱くようになった。彼女は、自らの結婚観を話す中で、以下のように日本人に対する違和感を説明している。

こっちはなんでもやっぱレディ・ファーストです。それで日本嫌だなんて思うんですよ。だから自分も日本人の人と結婚できないと思うんですよ。まず日本人の女の子になれないから(笑)。尽くせないですよ。

(SG5)

やっぱり、英語が喋れない人とは(結婚は)無理かな。日本語が喋れても、英語を喋ってもらわないと。基本、英語が大事なかなと思って。日本人の人だったら、日本語オンリーだったら、つきあっていけないと思うんですよ。私たぶん、日本人の人が喋るカタコトの英語が嫌いなんですよ、申し訳ないですけど(笑)。(SG5)

このような考え方を持つ SG5 は、自身について「外見が日本人、プラス中身は外国人みたいな人だと思っていたらベスト」と述べており、明確に日本で生まれ育った日本人との差異を強調する。また、彼女は将来的にグアムとは異なる場所で生活したいと考えているが、移住先の候補に日本は入っていないという。

一方で、SG6 のように日本社会における「日本人」の範疇の狭さを理由に、「日本」から距離を置く者もいる。彼は、自身のアイデンティティについて「自分はやっぱ日本人だって、それだけはやめられない」と述べており、日本語の勉強には人一倍精力を注いできたと話す。しかし、実際に日本社会や日本に住む日本人と関わりを持つことについては、あまり興味がないという。その理由に、自身が日本では日本人として扱ってもらえないことをあげている。例えば、SG6 は、日本に里帰りした際に、親族から無条件に「アメリカ人」として扱われてショックを受けたエピソードを以下のように話す。

面白いことがあったのが、田舎に行ったんですけど、おばあちゃんに会いに。1カ月ぐらい日本に帰ったんですけど、英語が分かるって言ったから「さすがアメリカ人」って言われたんですよ。違うからって(笑)俺、日本人だし純血だし。確かにアメリカに住んでてグアムに住んでるから、日本人から見たらやっぱ違うんでしょうね。やっぱり日本に住んだ人が日本人。違う人は日系人または何々人っていうように見ちゃうんでしょうね。[それが親族であっても…] そう。親族であっても。(SG6)

このように、彼は日本に渡航するたびに外国人としてカテゴライズされ、自らの日本人アイデンティティを維持することが困難になる状況に直面してきた。SG6 は、このような経験を通じて、むしろグアムなど日本以外の場所で生活していたほうが、自分が日本人らしくいられると考え、リアルな「日本」と距離を置くようになったという。

この SG5 と SG6 の事例が示唆しているのは、たとえ日本語や日本文化に精通していたとしても、あるいは強い日本人アイデンティティを保持していたとしても、日本社会における文化的閉鎖性が要因となって「日本」と距離を置く場合があるということである。

以上、新二世の「日本」からの距離の取り方とその背景要因を記述した。かれらは、「日本」との日常的・非日常的な接触を通じて、日本社会に対するネガティブなイメージを持つようになったり、日本で生まれ育った日本人と日本に住んだことのない自分との差異に気づいたりするようになっていた。それと同時に、「グアム」（場合によってはアメリカ本土やハワイ）に対するポジティブなイメージを構築し、グアムのローカルな社会関係に深くコミットするようになっていた。

5.2 ディアスポラ性の変容

ここまで、新二世が「日本」から距離を置く様子やその背景要因を記述してきた。ただし、かれらの「日本」からの距離の取り方は固定的ではなく、時間の経過やトランスナショナルな移動の中で変容することもある。本項では、憧れだった「日本」から距離を置くようになった SG7 と、遠ざかっていた「日本」との距離を縮めるようになった SG1 の事例を紹介し、新二世のディアスポラ性の変容過程を明らかにする。

①憧れだった「日本」から距離を置く

まず、日本の高校と大学に進学したことで「日本」から距離を置くようになった SG7 の事例をみていく。彼女は、グアムの中学校を卒業した後、日本の高校に進学した。その理由として、日本の学校生活を経験してみたかったことと、狭くて不便なグアムから出てみたかったことをあげている。SG7 は、進路選択時の様子を次のように振り返る。

まあ 14、5 歳だったので。日本っていろいろあるじゃないですか、食べ物もおいしいし、すごく便利で…。グアムって不便じゃないですか、車

ないとどこにも行けないみたいな。だから日本は結構自由な感じで、楽しめるかなってイメージがありましたね。(SG7)

しかし、日本に進学した後、部活動における上下関係への違和感、「とにかく良い大学に入って、良い企業に就職する」という大学進学から就職活動まで決められたルールに乗らなければならないことへの不満、またそのルールに乗ろうとする主体性のない同級生に対する疑問などが噴出した。そして、自由を求めて移住したはずの日本が、実際は自由を縛る場所であったことに気づき、多大なストレスを抱えることとなった。

大学の名前で楽々進みたくないし、何してるんだろう、みたいな感じが多くて、やりたいことあるのにできなかったのが1番つらかったかなと思います。(SG7)

彼女は高校卒業後に日本の有名大学に進学したが、すぐに休学しグアムに戻った。休学期間中は、グアムの家族や友人とストレスのない生活を送ることができ、さらに自分のやりたいことを発見することができた。ちょうどグリーンカードを取得できたこともあり、彼女はそのまま日本の大学を退学し、グアムでより良いライフスタイルを追求しながらマイペースな生活を送ることを決意した。現在は、日本の友人ともほとんど関わることなく、この先も日本に住む予定はないという。そんな彼女は、自らを柔軟な考え方を持つマイペースな「アイランド系」と表現し、日本に住む日本人との差異を強調する。

生まれたのは日本で日本人だけど、やっぱり考え方は日本離れしてるかなと思いますね。グアムっていろんな人いるじゃないですか。だから、なんかアイランド系な。(SG7)

このように、SG7は日本への帰還経験を通じて「日本」に対するイメージと「グアム」に対するイメージを再構築し、かつては憧れだった「日本」から距離を置くようになっていた。

②遠ざかっていた「日本」との距離を縮める

一方で、もともと「日本」と距離を置いていたにもかかわらず、グアムやアメリカ本土で生活することで「日本」への親和性や帰還の願望を強めるようになったSG1のようなケースもある。学生時代の彼は、日本への関心は非常に薄く、日本に住んでみたいと思ったことは一度もなかったという。進学先も、高校の友人と同じようにアメリカ本土の大学に決めた。将来的には、そのままアメリカ本土で就職先を見つけ、そこで定住していくものだと思い込んでいた。しかし、大学卒業後、彼はアメリカ本土の厳しい就職状況を目の当たりにし、結局、仕事を見つけることができず、グアムに戻ることを決断した。

*[日本に行こうとはしなかったんですか?]*その当時はなかったね。行っときゃ良かったけど。日本の方が楽しかったよね。その時は周りが全員アメリカって言っていたから。あと、日本はちょっと、日本にこれから住むことはないかなと思ったから。まさか、こっち(グアム)に戻って来るとは思ってなかった。*[大学の時に戻るって決めたんですね?]*うん。とりあえず卒業だけして帰ってこようと。*[なんで戻ろうと思ったんですか?]*仕事がなかったから。メインランド(アメリカ本土)やっぱ厳しい、厳しい。(SG1)

SG1にとってグアムで生活していくことは全く予想していなかったことであった。アメリカ本土で職が見つからなかったことの悔しさや不甲斐なさを抱えたまま、彼はグアムの観光地で働くことになった。しかし、グアム社会に深く関与していく中で、4.1 ②で記したような現地の人々と日本人との間に生じる格差や不平等を経験し、次第にグアム社会に不満や怒り

を覚えるようになったという。

ローカルは、なんか変にプライドを持っているの。俺らの島だ、みたいな。小さいお山の大将やっている。でもね、今もう日本人観光客に支えられているし、日本人の存在は大事。日本人いなかったらもう（グアムは）潰れる（…）やっぱ、働かないからね、こっちの人は。だからもう、日本人が倍働かないと仕事がついていかない。[ローカルというのは?]
チャモロ系、フィリピン系、であと島の人。周りの島の人、ミクロネシア。[そういう人たちとは違う?] あいつらとは違うね、一緒にされちゃちょっと。(SG1)

このような状況に対抗するように、SG1は幼少期や学生時代には持つことのなかった「日本人であること」に対する強いプライドを掲げるようになった。同時に、日本に帰還して生活を送ることに対して憧れを抱くようにもなった（上記のSCRIPTにあるように、彼は大学進学時に日本に「行つときゃ良かった」と後悔の念を語っている）。しかし、日本で安定した職に就くことができる見込みがなく、日本への移住にかかる資金やネットワークも不十分であるため、グアムに留まりつづけている。

このように、時間の経過やトランスナショナルな移動の中で、「日本」から距離を置くようになったり、「日本」との距離を縮めるようになったりするケースがみられた。新二世は、ライフコースにおいて様々な社会や現実に直面する中で、「日本」との距離の取り方を変化させていたのである。

6. 結語

ここまで、ディアスポラ性の観点を通じて、新二世のトランスナショナルな生活経験とかれらの「日本」との距離の取り方の関係を分析・考察してきた。最後に、本研究より得られた知見が新二世に関する研究に与える示唆を二点述べる。

第一に、新二世を取り上げた先行研究では、トランスナショナルな生活を送る新二世が他の移民世代よりも「日本」との親和性を醸成させたり、日本とのネットワークを保持したりしていることが指摘されてきた。一方で、本研究では、トランスナショナルな生活を送っているからこそ、「日本」から距離を置くようになる新二世の姿を明らかにした。このことは、新二世のトランスナショナルな生活は、「日本」への親和性を強めるだけでなく、逆に弱める場合もあるということを示唆している。したがって、新二世の特徴や経験を捉えようとする場合、かれらの持つディアスポラ性のグラデーションを、その背景要因とともに分析・考察していくことが重要となるだろう。

第二に、本研究では、新二世の「日本」との距離の取り方が、時間的・空間的移動の中で変化することも明らかになった。このことは、ディアスポラ性を固定的・静的なものではなく、トランスナショナルな移動を通じた出会いや、進学・就職など様々なライフイベントに影響を受けながら変容しつづけるものとして捉える必要があることを示唆している。この知見は、ディアスポラ性の概念の理論的発展にも貢献できると考える。

本稿では、グアムの新二世という特定の場所と集団に焦点を当てたが、今後は異なる地域や立場にある新二世の「日本」との距離の取り方を、ディアスポラ性の観点から比較検討していく必要がある。これについては、今後の課題としたい。

〈注〉

- 1) アメリカでは、1965年の移民法改正以降に移住した日本人が新一世、その子世代が新二世と呼ばれる（Tsuda 2016）。また、日本で出生し幼少期にアメリカに移住した日本人移住者や、両親のいずれかが日本人ではない者（いわゆるハーフ・ダブル）も新二世に含める場合が多い（山田 2019）。本稿の対象となるのは、アメリカ（グアム）で出生した者と、日本で出生し幼少期にアメリカ（グアム）に移り住んだ者であり、全員が1980年代後半以降に出生した両親と

もに日本人の二世である。

- 2) 「ディアスポラ」は、もともとユダヤ人やアルメニア人など特定の民族集団の強制的離散に関する歴史的経験に言及する言葉として用いられてきた。しかし、社会の変化や研究の発展の中で、その用法は拡散し、現在は様々な移民に対して用いられるようになってきている (Brubaker 2005)。本稿の対象である日系移民についても、欧米の移民研究では「ジャパニーズ・ディアスポラ」(Adachi 2006) と括られることがある。
- 3) 他のグアムの二世については、芝野 (2016a; 2017) を参照のこと。また、これらの親世代 (新一世) については、芝野 (2016b; 2020) を参照のこと。
- 4) 日本統治時代のグアムについては Higuchi (2013) が詳しい。
- 5) 観光開発におけるグアムの「日本化」を、戦後の新しい植民地支配であるとする見方もある (山口 2007)。
- 6) なお、グアムの公立学校ではチャモロ語やチャモロの伝統文化を学ぶ「チャモロ学習」が必修化されており、毎日何らかの形でグアムとチャモロのつながりを学ぶ機会が設けられている。
- 7) Guamanian は、もともとグアムのチャモロ人を指す言葉であり、マリアナ諸島のチャモロ人と区別するために用いられていたが、1980年代以降、グアム住民あるいは非チャモロ人のグアム定住者を意味するようになった。その背景には、チャモロの文化復興運動 (チャモロ・ルネサンス) が広がる中で、グアムのチャモロ人がチャモロ人としてのアイデンティティを強調するようになったことがあげられる (長島 2015)。
- 8) こうした状況は、他の研究でも報告されている。例えば、O'Reilly (2009) は、親とともにリゾート地に移住したイギリス系移民二世代が、青年期になるにつれて低賃金の観光業にしか就くことができない辛さや退屈さに悩む姿を描いている。
- 9) グアムには在外教育施設のグアム日本人学校とグアム補習授業校 (幼稚園・小・中学部) が設置されており、両者は同じ校舎を利用している。日本人移住者は、ほぼ例外なくいずれかの教育施設に子どもを通わせている。2010年代あたり

から、グアム日本人学校及び補習授業校には長期滞在・永住家庭と国際結婚家庭の子どもが増加しており（芝野 2014; 2015）、最近では全体の6～7割を占めるようになってきている（芝野 2018a; 2018b）。ただし、こうした傾向はここ数年の出来事であり、本研究の対象者の多くが両施設に通っていた約15年～20年前は、現在ほど学校が多様な人々で構成されていたわけではない。

- 10) インタビュー・データ内における筆者の発言は [], 補足は (), 中略は (…) で示した。なお、プライバシー保護の観点から本論に支障のない範囲で情報の一部を修正している。また、読みにくさを回避するために発話を整えた箇所がある。

〈引用文献〉

- Adachi, Nobuko. (Ed.), 2006, *Japanese Diasporas: Unsung Pasts, Conflicting Presents and Uncertain Futures*. London: Routledge.
- Brubaker, Rogers., 2005, "The 'Diaspora' Diaspora.", *Ethnic and Racial Studies* 28 (1), pp.1-19.
- 知念聖美, 2008, 「二言語で育つ子どものアイデンティティ」佐藤郡衛・片岡裕子編『アメリカで育つ日本の子どもたち－バイリンガルの光と影－』明石書店, pp.172-190.
- 藤田結子, 2012, 「『新二世』のトランスナショナル・アイデンティティとメディアの役割－米国・英国在住の若者の調査から－」『アジア太平洋研究』37, pp.17-30.
- 外務省, 2019, 「海外在留邦人数調査統計（令和元年版）」外務省領事局政策課。
- Guam BSP., 2017, *Guam Statistical Yearbook 2016*. Guam Bureau of Statistics and Plans.
- Higuchi, Wakako., 2013, *The Japanese Administration of Guam, 1941-1944: A Study of Occupation and Integration Policies, with Japanese Oral Histories*. Jefferson: McFarland.
- 井上郁子, 2015, 「ミクロネシア連邦からグアムへの移民増大がもたらしている社会

- 問題の一考察－米国のミクロネシア地域における政策とその責任－』『日本福祉大学経済論集』51, pp.61-88.
- 南川文理, 2007, 『「日系アメリカ人」の歴史社会学－エスニシティ、人種、ナショナリズム－』彩流社。
- 中山京子, 2015, 「マリアナ諸島の公立学校におけるアイデンティティの育成－グアムの社会科教育を中心に－」『社会科教育研究』125, pp.120-131.
- 中山京子, 2018, 「グアムへの日系移民」日本移民学会編『日本人と海外移住－移民の歴史・現状・展望－』明石書店, p.74.
- 長島怜央, 2015, 『アメリカとグアム－植民主義、レイシズム、先住民－』有信堂。
- O'Reilly, Karen, 2009, "The Children of the Hunters: Self-Realization Projects and Class Reproduction". In Benson, M., and O'Reilly, K. (Eds.), *Lifestyle Migration: Expectations, Aspirations and Experiences*. Farnham: Ashgate, pp.103-119.
- O'Reilly, Karen, 2012, *Ethnographic Method* (second edition). Oxon: Routledge.
- 佐藤郡衛, 2008, 「海外で育つ子どもの教育」佐藤郡衛・片岡裕子編『アメリカで育つ日本の子どもたち－バイリンガルの光と影－』明石書店, pp.12-27.
- 芝野淳一, 2014, 「日本人学校教員の『日本らしさ』をめぐる実践と葛藤－トランスナショナル化する在外教育施設を事例に－」『教育社会学研究』95, pp.111-130.
- 芝野淳一, 2015, 「在外教育施設における『学力』問題－グアム日本人補習授業校におけるフィールドワークより－」『部落解放』716, pp.68-80.
- 芝野淳一, 2016a, 「国境を越える移動実践としての進路選択－グアムに住む日本人高校生の存在論的移動性に着目して－」『異文化間教育』43, pp.104-118.
- 芝野淳一, 2016b, 「国際移動する母親のジェンダー規範をめぐる経験－グアムの日本人コミュニティを事例に－」『移民政策研究』8, pp.107-122.
- 芝野淳一, 2017, 「新二世の帰還移住過程における構造的制約－グアムの日本人青年を事例に－」『ソシオロゴス』41, pp.17-35.
- 芝野淳一, 2018a, 「在外教育施設における教育ニーズの多様化－グアム日本人学校を事例に－」『大阪成蹊大学紀要』4, pp.275-285.

芝野淳一, 2018b, 「日本人学校における教員のトランスナショナルな教育戦略－グアムの在外教育施設を事例に－」『多文化関係学』18, pp. 35-49.

芝野淳一, 2020, 「海外移住する日本人の教育戦略－グアムのライフスタイル移住者を事例に－」『国際教育評論』16, pp.1-16.

竹沢泰子, 2017, 『日系アメリカ人のエスニシティ (新装版)－強制収容と補償運動による変遷－』東京大学出版会。

Tsuda, Takeyuki., 2016, *Japanese American Ethnicity: In Search of Heritage and Homeland Across Generations*. New York: New York University Press.

Tsuda, Takeyuki., 2018, "Diasporicity: Relative Embeddedness in Transnational and Co-ethnic Networks". In Cohen, Robin., and Carolin, Fischer. (Eds.), *Routledge Handbook of Diaspora Studies*. Oxon: Routledge, pp.189-196.

Tsuda, Takeyuki., 2019, "Japanese American Ethnic Return Migration Across the Generation." In Tsuda, Takeyuki., and Changzoo, Song. (Eds.), *Diasporic Returns to the Ethnic Homeland: The Korean Diaspora in Comparative Perspective*. Cham: Palgrave Macmillan.

山田亜紀, 2019, 『ロサンゼルスの新日系移民の文化・生活のエスノグラフィ－新一世の教育ストラテジーとその多様性－』東信堂.

山口誠, 2007, 『グアムと日本人－戦争に埋め立てられた楽園－』岩波新書.

山口誠, 2010, 「米領グアム島にみる日本人観光の特性とその歴史性」『関西大学経済・政治研究所 資料と調査』107, pp.97-111.

中京大学現代社会学部紀要 14 (2) 原稿

